



Title	宋代官窯における青磁の研究 : 南宋修内司官窯を中心に
Author(s)	孟, 白麗
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/47102
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	孟白麗
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第20667号
学位授与年月日	平成18年9月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	宋代官窯における青磁の研究—南宋修内司官窯を中心に—
論文審査委員	(主査) 教授 藤田 治彦 (副査) 教授 大橋 良介 教授 上倉 庸敬

論文内容の要旨

本論文では、まず宋代の青磁に関する各種資料と伝世品を分析している。それらに最新の発掘結果を加え、実証的考察を試みている。その結果を中国の伝統思想と比較することによって、官窯青磁の精神性を美学的に解明することが、本論文の目的である。

宋代は各種技術の発達とともに多様な陶磁様式が誕生した。その点で、宋代の陶磁器は、中国陶磁の理想的な存在であった。宋代の陶磁は、元、明、清時代から現在に至るまで、常に模倣の対象となっており、宋代の官窯に関する研究は、非常に重要な意味を持つが、この研究領域は、昔から不明な問題を抱えている。本研究は、宋代の三つの官窯の中でも最も重要な位置にあるとされる、修内司官窯を中心的な研究対象としている。宋代の文献には『坦齋筆衡』以外に詳細な記述が少ないため、文献にもとづいて宋官窯の実態を明らかにすることは困難で、さまざまな発掘調査を経た現在、これまでの研究は大幅に見直されなければならない状況にある。

第一章では、宋官窯がいつ、どのようにして成立したのかを検討している。まず、『坦齋筆衡』と『格古要論』における「古窯器論・官窯」の記述と『遵生八牋』における「論官哥窯器」の記述を取り上げ、古文献上で南宋修内司官窯について確認するとともに、近年の関連先行研究を、続いて、修内司官窯の伝世品を検討している。また、いくつかのコレクションの所蔵品を調査することによって、修内司官窯の青磁の一般的な特徴を取り出している。これらに共通して見られるのは、素朴で簡潔な形と優美な粉青釉である。胎の土と淡青色の釉とが見事な調和を示しており、表面は素紋で、貫入が文様の代わりとなっている。こうした特徴は、古文献上の記述とかなり一致しているとする。

第二章では、修内司官窯の遺跡である杭州老虎洞の発掘品における窯の構造、工芸技法、造形形式、技術的側面、さらに造形・意匠の面から、北宋汝官窯と南宋修内司官窯との影響関係を検討している。両者の相違点についても言及している。粉青磁や米色青磁の本質から見て、この地域独特な材質から生まれた特色が、実は高度な技術によって、修内司官窯で完成されていた。

第三章では、修内司官窯の青磁の造形に、伝統的民族精神が象徴的にあらわれていることを見ている。南宋時代は文芸復興の時代であり、中国古代の文化・精神、とりわけ儒教の文化や精神を再興しようとした時代であった。その実質的な担い手であった士大夫たちは、政治・経済のみならず宋代の文化を全面的に指導した、優れた教養人、知識人でもあった。彼らは儒教精神についても造詣が深く、宋代における儒教文化・精神の復興に、多大な影響を及ぼした。こうした文化的・歴史的背景の下、士大夫たちは復古主義を志向した。このような文化気運の下に愛国主義と復

古主義が宋王朝治政の方針にもなった。また、彼らは古代の伝統文化を尊重し、古代式の祭祀を当代に復興しようとし、こうした祭祀に供される青磁を焼成することが南宗官窯の大きな役割であった。祭祀に用いられた古代の青銅器と官窯で焼成された青磁祭器とを比較すれば、それがいかに忠実に模倣されたかが分かる。とはいえ、南宋官窯の青磁祭器は青銅器ほど象徴性を帯びた文様をもたず、玉のような外観を呈する厚塗りの青磁の釉および素文には、儒教的精神があらわれていると見ることができる。青磁の釉は玉を模倣してつくられている。

儒教の考えでは、玉は仁の徳をあらわすことから、工芸品である青磁には、南宗時代の文芸思潮の精神が反映されているともいえる。当代の士大夫たちは工芸品に関して、その外観的な美ではなく、対象を通して現われる儒学の「道」と「徳」という内観的なものを重視していた。彼らは、具体的な工芸品のうちに、精神性を見だし、それらの工芸品は、そこに「道」と「徳」が見いだされることで、彼らの美的対象となったとする。

第四章では、宋代の諸芸術がどのような精神から生まれたのかについて論じている。唐代の陶磁器と宋代青磁を比較検討し、後者が外面の装飾を極力排して、簡素な表現をとっていると述べる。また北宋汝官窯に比べてみれば、修内司官窯の青磁は、完璧というよりは、素朴の美と見ることができ、こうした特徴の背景には、素朴であることを尊しとする宋代の美意識があるとする。宋代の絵画やそれに対する論評を見ても、士大夫の精神が諸芸術に反映していることは疑い得ない。彼らの精神を支えたものは、隠逸思想と理学であり、宋の士大夫たちは、清新、素朴、自然を旨とする精神を賞揚した。当時、絵画における最高のものを「逸格」としたが、やがて「逸」という美術一般に適用される理念となり、それは作品制作の原理ともなった。「逸」は内なる素朴な精神を、簡素にして自然な形式のうちに具現化することであって、宋代に独自の芸術が確立されるための指導原理としてきわめて重要な役割を果たしている。青磁には、老荘思想から受け継がれてきた素朴、無為自然といった美意識もあらわれている。これらの美意識が、南宋修内司官窯の青磁の制作理念として働いており、青磁の美とは、器の内側に宿る理知的な精神のあらわれである。宋代の理学という広く、深い宗教の真髄と伝統文化を再創造する理念のもとに、その時代独特の精神文化が生まれ、宋の青磁が創造されたといえよう。さらに、南宋の祭祀文化は内容として確実に儒教の伝統精神を受け継ぎ、また祭祀、さらには芸術上の形式表現として老荘思想の「逸」を展開したといつてよい。道教と儒教が融合して形成された理学は宋代において、中国古代から続く「礼」の伝統を再び実現したのである。本論は、青磁は宋代の美意識が目に見える形で復興させた「礼」に他ならない、と結論している。

論文審査の結果の要旨

宋の青磁がつくられて以来千年以上の年月が経過した現在、さかんに発掘調査が進められ、この分野は、次々と従来の説が覆される状況にある。その一方で、これらの青磁に関しては、いまだに骨董品的な価値のみが重んじられている側面がある。このような状況で、宋の青磁が、どのような精神から生まれたのかを論じた研究は少ない。そのような課題に取り組んだのが、本研究である。

本研究は、古文獻と最新の発掘調査の結果などを踏まえ、宋の青磁についてさまざまな側面から考察を加えている。従来、宋の青磁については、その完璧さや優美さなどが注目されてきたが、宋代の人々の精神を支えたものは、隠逸思想と理学であり、宋の士大夫たちは、清新、素朴、自然を旨とする精神を賞揚したことに注目する。当時、絵画における最高のものを「逸格」とした。それは、やがて「逸」という美術一般に適用される理念となり、作品制作の原理ともなった。「逸」は内なる清冽な精神を、簡素にして自然な形式のうちに具現化することであって、宋代に独自の芸術が確立されるための指導原理として、きわめて重要な役割を果たしていた。

このような士大夫の精神は青磁にもあらわれ、そこには、老荘思想から受け継がれてきた素朴、無為自然といった美意識もあらわれている。これらの美意識が、南宋修内司官窯の青磁の制作理念として働いており、青磁の美とは、器の内側に宿る理知的な精神のあらわれであることが見て取れる。宋代の理学という広く深い宗教の真髄と伝統文化を再創造する理念のもとに、時代独特の精神文化が生まれ、宋の青磁が創造されたといえよう、と本論は結論付けている。

この分野は発掘調査などにより次々と新説が提出される領域であり、本論文が基礎とした調査研究も、新たな発見

等によって疑問視される日が来るかもしれない。しかし、宋の青磁の美について取り組んだ研究は極めて少なく、本論は、「逸」の理念に注目し、その「礼」の伝統との関係を指摘するなど、研究状況が変化しても、美学的研究として一定の価値を保ち続けるであろう。よって本論は、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい論文であると判定される。